
蒼い月の光 ~ Blue Moon Night ~

朧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い月の光 ～Blue Moon Night～

【Nコード】

N7633C

【作者名】

朧月

【あらすじ】

黒羽快斗、そして怪盗キッド。怪盗と探偵。表と裏のような存在だ。蒼い月の輝く夜空に、キッドは白い翼を広げる。特殊な光をもつ宝石、Moonlightに導かれ、この表裏が今重なり合おうとしていた。CNR短編小説・蒼い月の光～Blue Moon Night～のリメイク版。是非お楽しみくださいませ。

00. プロローグ

「よし、次の獲物決定だな！」

パチン、と腕を鳴らし、その記事に赤丸をつけた。今更だが、オレの朝は新聞、つまり情報収集から始まる。

今つけた丸印は、次の獲物。日本語名で月光って言っらしいけどな……その石の特徴から、『Moon Light』っつー名前がつけられた宝石が、日本で飾られるんだと。こりゃー、スルーは出来ねーだろ。

ピラリ、と記事をめくる。そこに代々と映る姿を見つけて不敵に笑ったオレを、影が覆った。げっ、あああああ青子！？

「かーいと、今朝も随分キッドにご執心かな？」

「そ、そんなんじゃないよっ！でもホラ、昨日も活躍したみてーだな。キッド」

「ふうーん、青子知らなかったよ」

にやあくって、怖っ！知らねーワケないだろ。あーあ、コイツにこの話題は禁句なんだよなあ。

「警察もキッドにはなす術なし、かあ。今度もまた随分派手に取ったんだ？」

「だーかーら、キッドに叶う奴なんかいいねーつつつたろ？」

「もっつ。快斗はキッドの味方ばかり。青子、キッドなんか大嫌い！」

顔面めがけて飛んできた新聞を紙一重でよけた。

「うおっと、あつぶねー！ 何しやがる、この凶暴アホ子！」

こうやって、ふざけあえてるこの状態が、オレにとって最高の時間なんだ。

……初めのキツカケがなんだったか？ んなもん、覚えてるに決まってるだろ。

オレがキッドになったのは、親父の死の真相を突き止める為だったんだよ。尊敬してたマジシャンの親父が、実はキッドで、しかもそのせいで殺されたなんて事実を知っちまったから。

全てを終わらせる為に始めたんだ。奴等の野望を打ち砕く為に。唯一つ、奴等の手がかりとなる、命の石、パンドラを求めて。

そうだった筈だよな？ けど、名探偵に出会ってからオレはちょっとだけ変わった。

あの小さな体でオレを追いかけてくるアイツの正体が、実は高校生探偵の工藤新一だとか、んな事はどうだっていいんだ。ただ、アイツの存在がある限り、キッドは楽しい。

アイツ、名探偵はオレに似てる。顔とか、そんなんじゃない。オレは親父の敵討ちの為だけど、アイツは何と戦ってたんだろうな。好きな子に正体を隠し続けてんのは、辛いだろうに。オレには痛いほど判るっのに。

あれほど強い瞳で真実を追いつづけることが出来るアイツを、心

の何処かで尊敬している。

もし、出会い方が違っていたなら、多分最高のダチだった。それとも最高のライバルか。

オレは怪盗、奴は探偵。本来敵同士の筈だし、似てるなんて表現おかしいのかも知れねーけど。

最も近いもののような感覚すら受けるんだ。

「快斗、どうしたの？　もしかして、打ち所悪かった？」

ハツとして、前に視線を戻した。青子が首を傾げて、不思議そうにしてる。ついさっきまで喧嘩腰だったのが、よく言っぜ。

「何でもねーよっ。あ、それより青子……今度の日曜日、空いてつか？」

「えゝ……と、うん！　何があるの？」

「いや、トロピカルランドにでも連れてってやろうと思ってな」

「ホント？　！　？　行く行く！　」

「んじゃ、空けとけよ。オレ多分その前の日予定あるから、ゆっくりになるかも知れねーけど」

一仕事終えて疲れた後、四六時中明るいオメーの顔は目の保養になるんだよ、なんて言えねーよな。おっと、その前に今日学校帰りに予告状出さねーとな。

……オレの正体知ったら、どんな顔するかな、こいつ。キッドを嫌う気持ちも分かるよ、そりゃ中森警部にも悪い事してるって思う

しな。

黒羽快斗には、多分少なからず好意も抱いてくれているだろうけど。キッドの事は絶対認めるわけねーからな……ま、バレっこねーか。

気楽にそんな事を考えていたオレだけど、正体がばれるその日は、そう遠くなかった。

まさか、黒羽快斗の姿であいつに遭遇するなんて、思ってもみなかった。

00. プロローグ（後書き）

朧月の一言

えーと、どうもこんばんはー（＾－＾＊）そして、初めての方初めまして！

前にもこのお話を読んで下さった事のある方は、改めましてお久しぶりですvv

短編だったこのお話を連載で、としたのは、まあ長かったからという理由に他ならないのですが、

やはり私は改訂作業が相当苦手だという事がつくづく分かりました（＾－＾；

かなり初期の作品です。処女作候補の一つ。（確か、という候補が一杯あるんです^^；本当の処女作はそのうちのどれだったか、私自身思い出せない）

プロローグだけは書き下ろしです。見覚えがあるようなないような、なんじゃないかな？

本編は、加筆修正の作業を中心的にさせて頂いておりますv

短編時代は楽しく読んでいただけたようなので、変にエピソードをいじくるのもあれかな〜と。

というわけで、修正作業と並行して載せて行く事になりますが、どうぞ暖かく見守ってやって下されば嬉しいですv

まず、数ある作品からこのお話をお読みいただけて嬉しく思いますvこれからもどうぞよろしくお願い致します〜vv

さあ、本編へどうぞv

1st・白き怪盗と宝石『Moon Light』

蒼い月が照らす夜の街、その僅か一箇所に人が集まっている。彼らが囲んでいるのは、杯戸美術館……夜というにも関わらず、騒々しく騒ぐ人の声と、美術館を照らすライトがいつもよりまぶしく輝いていた。

人々の興味関心は、今皆一緒に一つ。待ちきれずにわいわい騒ぎながら、胸を躍らせ、その出現を待っていた。

そんな美術館から少しだけ離れたビルの屋上では、白い衣装を纏った一人の少年が立っていた。ヒュー、という風の音の中に、ばたと布の揺れる音が混じる。満天の星に飾られたその美しい夜空に、マントを風になびかせて現れた。白き怪盗は、自前のオペラブラスを覗きながら、不敵な笑みを零した。

「警察のヘリが、1、2、3……、4、5……5台か」

一体を見回した景色に見えた警察部隊の配置に、自分の通る経路を再確認する。確実なプランのイメージをすっかり練った所で、彼は「よし」と小さく呟き、高々と夜空に向けて両手を挙げた。

「Ladies and Gentlemen!! さあ、今宵のショーの幕開けだ」

彼はいつも通りの鮮やかな手口でそこに忍び込んだ。警察の目を誤魔化して、その場にいる沢山の観客達の興奮した声を聞きながら、空へと去っていった。

その天才的なマジックで鮮やかに宝石を盗み出す様は、全ての人を興奮させる。人々は精一杯の憧れと尊敬を込めて彼をこう呼ぶ。

『怪盗キッド』と。

1st・白き怪盗と宝石『Moon Light』

キッドからの予告状が警視庁に届いたのは、先日のキッド騒動が治まってすぐの事である。彼が指定した宝石の名前は『Moon Light』という。つまり日本語訳では、『月光』。その月光というのは、つい一週間ほど前にイギリスから送られてきた宝石だ。期間限定ではあるものの、博物館に展示が決まった宝石は、博物館のオーナーによってその名前が発表された。

その美しい見た目が月の光に似ていたので、月光とつけられた。翌日予告状が届き、警視庁捜査二課ではキッド専門の中森警部が皆に活を入れていた。

「いいか、キッドは今度はあの月光を奪うと言う予告状を送りつけてきた。なんとしても宝石を死守するんだ！」

いつに無く意気込んでいる警察軍団は、この日のために特別に助っ人　つまり、今がまさに旬の、眠りの小五郎というふざけた異名をもつ名探偵に捜査の援護を依頼した。

事の始まりはここからである。

予告日前日の江古田高校二年B組。ここではたった今、壮絶な争いが起こっていた。壮絶というのは語弊があるうか。つまり詳細を説明するとなんて事はない。

学校一のマジシャンである黒羽快斗と、学校一のおてんば娘である中森青子がいつも通りの下らない口喧嘩をしているのだ。

「また怪盗キッドが予告状出してきたのよ!? どうしてくれるのよ快斗!」

「なんでオレに言うんだよ! 文句があるならキッドに言えっ!」

男勝りに活発な青子は掃除用具入れからモップを持ち出して振り回し、それを超一流の身のこなしの快斗がふわりふわりとかわしていく。

たまに関係ないクラスメイトが被害に遭うのは、ご不幸様といった所だろうか。それでも夫婦喧嘩……もとい壮絶な争いは納まらずに加熱する。

「快斗はいつもキッドの味方じゃない！ 青子はあの泥棒にお父さんとられちゃってるのに！ バ快斗！」

「なんだよ、あほ子！！」

不毛な喧嘩を繰り広げている本人達は気付いてはいないのだろうか……自分達を「また夫婦喧嘩が始まった」と言う目で見つめる周りの視線を。

二人は、いわゆる公認カップルというものである。だから、クラスメイトにとっては、この日常的な喧嘩は夫婦喧嘩に相違ないのだ。本人達が気付いていないかもしれないお互いの気持ちは、クラス中に知れ渡っている。二人は無自覚だが両思いだ。

ただ、クラス中の誰もが知らないことが彼と彼女の間にはある。

彼……黒羽快斗のまたの名は、怪盗キッド。夜空を賑わす気障な怪盗だ。

そして彼女、中森青子は、警視庁捜査二課の中森警部。つまり、怪盗キッド専門の警部の娘なのである。

二人が実は本来正反対の立場であるということを知るのは、怪盗キッド本人である黒羽快斗と、この学校で唯一キッドの正体を知っている魔女、小泉紅子だけだ。

さて。一方、こちらは毛利探偵事務所。

今朝早くに依頼を受けた小五郎は、いそいそと警視庁に向かう準備をしていた。身だしなみを整えて、荷物を持って、いざ名探偵出陣！ と、タクシーに乗り込んだ彼の後ろには、当然のように付いてきている娘と居候の姿が。

「おい、何でお前等まで付いて来るんだよ」

「だってー、私もキッド見たいもん。ねえ、コナン君？」

「うん!!」

事件の事となると、必ずついてくるこの居候江戸川コナンの存在を、彼は目の上のたんこぶの如く思っているのだ。元気のいい返事に、今日もまた溜め息一つ。

「まったく、邪魔すんじゃないぞ？ この名探偵への依頼なんだから」

小五郎は呆れて二人に言った。タクシーは警視庁にたどり着くと、三人を降ろし去っていった。

彼はやる気満々で問題の博物館へと足を運んだ。後ろについていくコナンと蘭も、送り迎えの車内で、予告状や月光についての説明を受ける。

辿り着いた博物館の一番目立つ場所に、その宝石は堂々と輝いていた。思わず、三人は息を呑んだ。

「これが、Moon Light。月光なの？ 綺麗……」

一瞬で目を奪われた蘭は、ただじっとその輝きを見つめた。

宝石の色は基本的には青なのだが、光があたりと卵の黄身のように綺麗な光を回りに灯す。まるで、月そのものの色だ。何も無い所でぼんやりと青白く光るそれも綺麗だが、光を当てた時の色もなんとはいえない。博物館のオーナーの企画では、朝や昼は太陽の光でこの月光を照らし、夜は全ての光を遮断して、二種類の月の光を味わってもらおうとのことである。

だがそんな趣旨はどうでもいい。蘭はその宝石に、想って止まない彼を重ねていた。

「まるで、新一みたい」

「え？」

隣に居たコナンが首を傾げるが、見向きもせず、蘭は優しい顔でそれを見つめる。

「何かね、新一みたいな宝石だなんて思って。あいつの瞳を見てるみたい。事件の時もちろん輝いててかっこいいと思うんだけど、普段のあの柔らかくて優しい光も、私大好きなんだ」

コナンは顔を赤くした。蘭が工藤新一の事を話す時、可愛い表情を見せるのが彼の萌えどころらしい。

そして、キッドが予告した日の朝は訪れた。

夜に現れる筈のキッド対策は、朝から嚴重に行われていて、それだけ月光が価値のあるものと、三人は改めて実感させられたのだ。

コナン達が丁度警備の様子を確認している中、二人組みの高校生が顔を出した。

「凄い警備しとんなー……こらよっぱどのもんなんやな、その月光つちゅう宝石は」

「何感心してるんや。早よ中に入らんと、入れなくなったらどうするんや」

「そやな。行こ行こ」

二人は入り口の警備にあたっている警察官に軽く会釈した。

と、同時に何やら手厚く痛々しい歓迎を受けた後、はれた頬を不機嫌にさすりながら中へ入っていった。宝石の飾られた部屋にいる二人の姿を確認すると、口元に笑みを浮かべた。

「よお、相変らず仲ええな」

突然声をかけられた蘭とコナンは、驚いて振り向いた。

「服つ……じゃ、なくて平次兄ちゃん!!」

「和葉ちゃんも! どうしたの?」

平次はにっこりと笑い、二人に歩み寄った。

「俺もキッド捕まえんの手伝ったろって思ってたなあ。大阪から飛んできたんや」

「で、あたしはその付き添いや」

緊迫した雰囲気の中で、二人は明るくそう言った。空気の読めないのがある意味いい所らしい。

「あれ、二人ともそのほつぺたどうしたの?」

蘭の質問に、陽気な雰囲気だった二人は同時に顔を顰めた。

「……あ、ああ、これか? これはなあ……入り口に居った警備のおっちゃんらと、入った廊下に居った刑事のおっちゃんと、部屋の前に住ったひげのおっちゃんにやられたんや。何度も何度も、キッドの変装やないかって言うてな。ホンマ、失礼なやつちゃ!!」

「ホンマ最っ悪やーっ。あのおっちゃん、平次はともかくアタシまで……女のアタシまで思いつきりつねったんやで!? 信じられへんやろ!」

二人共、いかにも不機嫌な顔で頬をさすった。よほど悔しかったのだろう。

そして、ここは博物館からほんの少し離れたビルの屋上。
既に、キッドに扮装した彼は、望遠鏡でじつと博物館の様子を眺めていた。

「名探偵が二人に、その彼女が二人……。今回の仕事は面白くなりそうだな」

彼の口に綺麗な笑みが浮かぶ。予告時間まであと二時間だ。
彼は頭の中で何度もシミュレーションしながら、博物館の様子をじつくり窺っていた。

隣に居る寺井が、心配そうに話し掛ける。

「快斗ぼっちゃま、油断だけはしないで下さいね。彼等が関わっていつも窮地に立たされる快斗ぼっちゃまを見ていると、じいはい心配で心配で……」

しかし、キッドは寺井に向かってシニカルに微笑む。

「そんな心配すんなって、ジイちゃん。大丈夫だよ！ それに、ライバルが居ると張り合いが出来て仕事が楽しいんだ」

「し、しかし快斗ぼっちゃま……」

「ジイちゃん！ 今のオレは快斗ぼっちゃまじゃないぜ。この世を騒がせている気障な盗っ人……。怪盗キッドだ」

キッドは青白い月明かりに照らされながらもその風にマントを翻し、ハンググライダーで飛び立った。暗い夜空に白い姿が映える。
後に残された寺井は、心配な顔でずっと飛び立った彼を目で追っ

ていた。彼は寺井に見守られながら、博物館の屋上に優雅に舞い降りる。

「さーで、名探偵諸君……私を捕まえられるかな？」

不敵に笑った彼は屋上からふわりと降り立ち、驚き困惑する警官に向ってスプレーを吹き付けた。一人、二人三人……あっという間にその場は寝かされた警官達で埋まった。

「さあて、と」

キッドは警官の格好に扮し、入り口から堂々博物館に侵入した。

「このキッド様には楽勝過ぎるぜ、こんな罠」

幼い頃から馴染みの、中森警部の考えている事などお手の物。次々に待ち受けているトラップを楽々クリアして、そして月光がある部屋の前でその変装を解いた。

「……名探偵たちの前でこんな変装、意味ねーからな」

呟いたキッドは、堂々とその部屋のドアを開けた。

「キッド！」

叫んだコナンの足元に、トランプ銃が刺さる。続いて、間髪居れずに平次の足元にも。

一歩後ずさった彼らの僅かに出来た隙をキッドは逃さない。いとも簡単に宝石を手中に納め、無駄な動き一つなく閃光弾を一つ地面に打ち付けた。

まばゆい光が辺りを包み、コナン達の目には、真っ白な世界が広がった。思わず、目を細めずには居られない衝撃だ。

「く、くそっ!!」

「捕まえられるもんならやってみな、名探偵諸君」

に、と笑った口元からの楽しそうな声に、コナンと平次は顔を顰めた。スピードやトラップでの勝負となれば断然キッドに有利なのだ。

窓が割れる音がコナン達の耳に届き、光が消えた頃には、キッドの姿は何処にも無かった。

コナンと平次は一瞬だけ顔を見合わせた。

「……くっそ、あのフザけたコソ泥がつ!!」

「早よ追うで! あのアホに舐められたままでいられへんわ!!」

急いで窓の外を見た二人の目に、上空の僅かな白い影が映る。見上げる瞳に、自然と怒気が竦る。

「工藤、お前はそっち頼む!!」

「ああ、分かった!!」

博物館から出た二人は、スケボーとバイクでその白い影を追った。

どうやら、コナンの道が正しかった様だ。空を飛ぶキッドの白い影が、段々とはっきり大きく、明確な輪郭を描いてゆく。

「あんにやるー、絶対に追いついてやる!!」

スピードを上げたコナンの姿を、上空から一瞥した彼は、ふわりと近くの木に降りた。コナンが辿り着くまでの時間を頭で計算しながら、奪い取った宝石を月にかざす。

キラ、と光ったのは一瞬。月の光によって色を変えただけで、赤い石などどこにもありはしない。

「ちっ。また、はずれか」

当たり前なんて永遠にこないものかも知れないと、諦めにも似たため息が零れた。

ゆっくりと宝石を持つ手を下ろす彼は、すぐそこまで来ているコナンのスケボーの音もしっかり聞こえていた。

「待てよ、怪盗キッド！」

よっぱど急いでいたのだ。ゼエハア苦しそうな呼吸で、コナンは叫び、顔を上げた。

「んな必死にならねーでも、わざわざオメーの事待っててやったんだよ。ホラ」

微笑して、宝石をコナンの手元に放る。当然だが、受けとったコナンは怪訝な表情を浮かべた。

必死で追いかけてきたというのにあっさり返されては、少し苛立たしさを感じるらしい。コナンの顔には、悔しさも混ざる。

「……何の真似だ？」

「どうやら、その宝石はオレが求めていたものでは無かったようだからな。博物館に返しておいてくれ。今回は引き分けた、名探偵」

そう呟いたキッドは、強く枝を蹴り、再び夜空に飛び立つ。
後に残されたコナンは見送る事しか出来ず、宝石を持ったまま悔しそつにその場に立ち尽くした。

これが、そもそもの始まりとなる夜になろうとは、まだここに関わった誰もが知らない。

1st・白き怪盗と宝石『Moon Light』（後書き）

元が短編なので、あまり途中に後書き挟みたくありませんので。
快斗とかキッドとか、コナンに平次とかの雑談でもくつつけようか
と思ったのですが……希望あったりする？

なければ、後書きは最終話のみにつけようかと思います（＾－＾
*）

とりあえず、頑張つて加筆修正したので、お楽しみいただけたなら
幸いですv

2nd・ドッペルゲンガーな出会い

翌日の日曜日、青子と快斗は約束通りトロピカルランドへ遊びに出かけた。ただ、快斗は知らない。実はもう二カップル、そこに歩いているだなんて。

「なあ、工藤。何で女って、こんな面白い物に時間かけるんや……？」
「ああ。ホント理解できねえな……」

土産屋の前でしゃがみ込む二人の溜め息が重なる。今更言うまでもない、平次とコナンの二人だ。

キッドを逃がした残念会代わりと言うか、ただ単に遊びに来たかった幼馴染達二人におされた、と言うか。平次とコナンの男性陣の他にも二人、蘭と和葉が土産屋に入っている。

通常ならダブルデートな組み合わせだが、何故か男と女で分かれてしまうのも、やりたい事の差だろう。いや、仮にここに居るのが新一ならば、綺麗にカップル別に分かれたろう。

「まったく、アイツら何分待たせりや気が済むんだか」

「なあ、アソコのベンチ行かへん？ ええ加減こないな場所にしゃがんでんの辛いわ」

「オレも」

二人は再びため息をついて近くのベンチに腰掛ける。その前方十メートル程の場所で木に寄りかかっている人物に平次の視線が辿り着いたのは偶然だった。

疲れきった彼の半眼が、驚きに大きく開く。

「く、くくくくく工藤おーーーーー！！？」

大きすぎる声が、半径数百メートルまでこだまする。当然、隣のコナンはびくつと肩を震わせた。

「お、おいっ、何だよ！ そんな大声出すんじゃないよ。だ、誰か聞いてたらどうすんだ！？」

慌てながらも小声で怒ったコナンだが、平次はそれ所ではなく、口をぱくぱくさせながら、木に寄りかかる彼を凝視している。

「おい？」

さすがに不思議に思っただけでその先を覗き込んだコナンだが、今度は平次の視線がコナンに移る。

「工藤……おっ、お前！ 双子やったんか！？」

きょとんと眼を丸くして数十秒、平次を眺めたコナンの頭に、その奇妙な言葉がこだまする。

ふたご……フタゴ……双子！？

「はあ！？」

その意味に気づいて、ようやく我に返ったコナンの素っ頓狂な声もまた辺りにこだました。

あまりに大仰な驚き方をする平次の様子は、先程まで彼が凝視していた木にいる人物を見て、コナンも初めて理解し納得した。

「ばーろ、オレは一人っ子だよ。赤の他人に決まってるんだろ？　ったく、蘭といいお前といい、そんなオレとアイツが似てるかよ？」
「……何で姉ちゃんがここに出てくるんや？」

平次は怪訝な表情でコナンに尋ねる。

それは、コナンが初めてキッドと会った日の事。あの時の彼に相違ない筈だ。

蘭が絡む記憶は、コナンの中で霞む事はない。しかも、それは少しほろ苦い屈辱的な記憶だった。

「蘭も工藤新一とアイツを見間違えた事があったんだ。オレが女と歩いてたなんて、迷惑な勘違いしやがって。オレは街ですれ違つて一度見たただけだけど、アイツのせいで蘭に余計な誤解されたから、覚えてんだ……そんな似てるとは思わねえんだけどな。」
「……いや、そっくりやで？」

呆れ顔でコナンと彼を見比べる平次に、納得が行かないコナンはむっつりとした顔を返した。

「そうや！」

平次は、何か思いついた悪戯っぽい笑みを浮かべ、突然立ち上がり彼の元へ歩く。コナンは、勿論驚いて彼を止めようとしたが、平次はお構いなしにスタスタと歩いていった。

数メートル位の範囲に近づいて、平次は顔を顰め首を傾げた。木に寄りかかった彼は、ここに来てもまだずっと、あさつての方を向いている。

（こない視線送つとるのに、気付かん奴なんておるんかいな。顔はホンマ工藤に似とるけど、工藤と違って鈍いやつぢやな……）

平次は更に歩み寄った。まるでぞ知らぬフリに見える彼だが、何故か緊張した面持ちを浮かべている。それが更に不思議に思わせられる。

「よお、兄ちゃん」

ついに隣まで来た平次が声を掛けると、彼はびくつと肩を震わせ、振り向いた。顔を引きつらせ、戸惑いながらようやく口を開く。

「……な、なんだよアンタ。何か用か？」

動揺を隠せない口調で話す彼に、平次は再び小首を傾けた。

「いや、用なんてあらへんけど。オレの知り合いに似とったから声掛けてみたんや。あんたも、土産屋ん中の誰か待つとんのか？」

「……ま、まーな」

答えるなり、彼は平次の足元に視線をずらした。それは確かに一瞬だが、不機嫌な顔で上を見上げるコナンと眼が合つて、慌てて視線を平次に戻す。

意味深に一瞥された事に気づかないコナンではない。その視線には、どこか違和感を感じた。

「ほんなら、あそこのベンチで待つてへんか？ オレらも、土産屋に入つてつた連れに待たされてるんや」

「土産屋に、連れが？」

「そや。あんたも帰つてくるまで一人やと暇やろ？」

まだ戸惑う様子が消えない彼と間逆に、人慣れしやすい平次は話し方に全く遠慮がない。

数秒沈黙して考え込んだ彼は、小さく息をついた。

「まあな。……で、あんた達、誰？」

思い出したように付け足した彼は、当然ながら胡散臭いものを見るような目つきをしている。

平次はハツとして、少し苦い笑顔を見せた。

「すまんすまん。そう言や自己紹介がまだやったな。オレは服部平次や。大阪では名の知れた高校生探偵やで。ほんで、こいつが江戸川コナンや」

「……………どーも」

コナンは無愛想に軽く頭を下げる。こちらもまた、平次とのテンションは大違いだ。

彼は、『江戸川コナン』などと言う変な名前を聞いても全く動じなかった。まるで最初から二人の事を分かっていたかのように、あっさり自分の自己紹介に入る。

「オレは黒羽快斗ってんだ……よろしくな！」

そう名乗った彼は、先程より自然な振る舞いで、平次達とベンチに向かって歩き出した。そんな彼の後姿をじっと観察しながら、コナンは首を傾げる。そこに腰掛けるなり、コナンは探るような視線を快斗に送った。

「ねえ、お兄ちゃんさ、ボクとどこかで会った事ない？」

「ひ……ひ、人違いだろ？ ボウズ」

顔色を変えた快斗の声が上ずっている。更に訝しさを感じずには居られない反応だ。当然、隣に座る平次も微妙な空気に口を挟まずにはいられない。

「何や……二人とも知り合いか？」

「んー、よく覚えてないんだけど」

「ま、まあ、いいじゃねーか。すれ違つか位したかも知れねーけど、オメーも覚えてないしオレも覚えてないってんなら、赤の他人だろ？ なっ？」

強引に会話を終わらせた快斗一人、この有り得ないスリーショットに内心ビクビクしていた。探偵二人の間に座らされてしまったこの密着間は、キッドの時の比ではない。そして、土産屋の中には青子も居るのだ。

（くっそー、青子のせいだ。土産屋なんか寄りやがって！ 正体ばれたらどうしてくれんだ、アイツ！）

必死でポーカーフェイスを装っていたとしても、バクバクする心臓の音が、隣の二人に聞こえてしまうのではと思うと、気が気ではない。

快斗は、もちろん最初から二人の存在に気付いていた。むしろ、平次に見つかるよりずっと前。「そこら辺で待っててね」と土産屋に入って行った青子を見送ったすぐ後、同じように待たされて座る二人を発見した。

動くワケにも行かないが、二人を見つけた時点で、逃げ出したい気持ちで一杯だったのだ。

気づかないわけではない。人一倍気配には敏感だ。けれど、必死で眼を逸らしていただけ。

快斗をじつと見つめ、何か喋っている探偵のうち一人が、立ち上がって自分の方に向かってきた時は、心臓が止まるかと思った程だった。

「ほんで、もしかしてデート中やったん？」

「えー！？ あ、いやー……ただの幼馴染」

「へー、僕達も似たようなものだよ！」

声をかけられる度に心臓が跳ねる。三人で他愛ない雑談をしながらも、快斗は殆ど右耳から入って左耳から抜けていく状態で話す事になったのだ。

（あー……落ち着け、オレ。大丈夫……いつも通りでいればいいんだ）

先ほど早まった鼓動を何とか落ち着かせて、小さなため息をついた。楽しいデートの一日の筈が、最凶の厄日かと思うほど、前途多難な一日になってしまふとは。

一方、土産屋。

トロピカルランド限定お土産コーナーと書かれたポップの下で、蘭と和葉は相当な時間悩んでいた。その手には、二つの違うホルダー！。

「ねえ、どっちがいいと思う？」

「そやなあ……どっちも捨てがたいわ。」

ちなみに、補足しておく、別に二人は片方しか買うお金が無いわけじゃない。むしろ、この日は贅沢するつもりで多めに持って来ている二人の財布はしつかりつめられている。

ならさつさと両方買えばいいのに……と突っ込みたくなるのだが、それは置いておこう。

「あつ、和葉ちゃん！ これ。これも可愛いよー！」

その隣にも可愛いお土産があるのを見つけた蘭は、にゅっと手を伸ばす。しかし、そこには蘭のものではない手がかかった。

「あつ！」

二人の声が重なる。驚いて手を離れた二人は、お互いに声を上げ、顔を見あわせた。きょとん、としながら二人は数秒呆然とした。

「蘭ちゃん、どないしたん？」

和葉も、視線を二人の顔に移す。そして、その異様な光景に、彼女は突如目を大きくして、二人を指差しながら叫んだ。

「ら、ら……、蘭ちゃんが二人！！？」

「えっ？」

「あゝっ。本当だ！ 青子に似てる！！」

三人は目を丸くして、お互いの顔を見つめあった。どうやら同い

年位らしい事がわかった、三人の間に遠慮と言うものが取り払われる。

「あの、私毛利蘭!」

「アタシは遠山和葉や」

「蘭ちゃんに、和葉ちゃんか! 私の中森青子。よろしくね」

初対面だというのに、三人は一瞬で意気投合した。ようやく買うものを決めて、レジの前できやいきやい騒ぐ。

「へえ、青子ちゃんのお父ちゃんも警察官やの?」

「え? じゃあ和葉ちゃんのお父さんも?」

「そや。あたしのお父ちゃんは大阪府警の刑事部長やってんねん」

「私のお父さんも昔は警察官だったんだよ。あつ、今は探偵なんだけれどね」

「あーっ! じゃあもしかして、蘭ちゃんのお父さんって、あの眠りの小五郎?」

「え、う、うん」

毛利という苗字で分かったのだらう。青子は少し興奮気味にそう尋ねたが、蘭は僅かに苦笑した。

今更、仕方ないのかも知れない。でも、『眠りの小五郎』と父につけられた通り名はどうにもグータラオヤジを連想させてしまう。同じく探偵をしている新一は、『平成のシャーロックホームズ』だの『日本警察の救世主』だのといかにもクールで格好のよい通り名がつけられているというのに、この扱いの差は何だらう。

しかも、何がよろしくないって、そのグータラな通り名が相当ぴたり当て嵌まっているという事か。

蘭はそう考え、内心で溜め息をついた。

結局、悩んだ末に買う物も決めて、三人は仲良く店を後にした。

「青子ちゃんは、誰かと一緒なの？」

「うん。快斗って言うてね、幼馴染みなんだけど、そいつと一緒に来てたんだ」

幼馴染と言いながら、微かに頬を赤らめる青子に、蘭と和葉は自分達を重ね合わせ、途端ににやけた。

「ふーん、快斗君って言うのが、青子ちゃんのカレなんだ？」

「え？」

「隠してもアカン！好きなんやろ？ 快斗君の事」

「そっ、そんなんじゃないよっ！」

ムキになって否定しても、赤い顔まで隠しきれない。

「青子ちゃん、かわいいー」

「冗談や。うん、気持ち分かるで！」

蘭と和葉は自分達を棚に上げてクスクス笑いながら、口々に言っていた。

青子とも仲良くなった所で、和葉は何やらピンと来た顔で蘭に耳打ちする。それを聞いた蘭の顔も輝いた。

「青子ちゃん、アタシ達にも連れがおるんよ。よかったら合流せえ

へん？」

「勿論、青子ちゃんが快斗君と二人きりがいいなら邪魔しないけど……折角仲良くなっただし」

「えっ、ほんと？ いいの？」

青子も、嬉しそうに身を乗り出す。

「ええよ。平次が嫌がっても、アタシが（無理矢理）説得するし、快斗君次第やな。」

「大丈夫だよ、快斗は青子が言う事聞かせるから。」

女子高生三人集まると、そこには和気藹々とした談笑が生まれた。店から出た三人は、キョロキョロ辺りを見回し、ベンチでくつろいでいる彼らを見つけた。三人は同時に叫ぶ。

「平次！」

「コナン君！」

「快斗！！」

やっと来たか、と溜め息をつきながら、男三人衆は振り向いた。その一連の動作はまさに、息ぴったりだ。

顔を合わせた六人の中、やはり平次と和葉はお約束の声を張り上げた。

「ね、姉ちゃんが二人おるっ！！？」

「く、工藤君！！？ な、なんでなん？」

重なった声は、先程と全く同じ反応だ。六人はどつと吹き出した。一通り笑い終わった後、快斗は片手で腹を抱えながら、女の子集団に言った。

「なんだ、青子達も一緒に居たのか。あつ、オレは黒羽快斗。二人ともよろしくな」

につ、と笑って彼は後ろ頭を掻いた。基本的に彼は誰にでも親しげだ。そんなにこやかな雰囲気の自己紹介だから、蘭も和葉も壁を作ることなく微笑んだ。

「あたし、遠山和葉や。よろしく」

「私は毛利蘭。よろしくね、黒羽君」

青子はそんな三人の様子を見て、思い出したように慌てて言った。

「あつ、えつと…服部君と、コナン君だね。中森青子っていいまゝすつ。よろしくね」

「よろしく、青子姉ちゃん！」

「よ、よろしくな」

平次だけ一人、混乱して信じられないと言う表情が消えずに、彼女らを見つめていた。未だ平次には、その光景が驚愕以外の何者でもない。

（ド、ドッペルゲンガーや……信じられへん……………！）

六人は、男三人と女三人に分かれた。これもまた、自然な分かれ方。

この事が快斗の最大の不幸になるとは、この時の彼等は知る由もない。

2nd・ドッペルゲンガーな出会い（後書き）

THE ふりいとーく

は？ 何やて、普通にこん位似てる奴おるやろ、て？ 世ん中には似とる奴が三人居る？

アホか、アンタら！ 似てるっちゅーレベルやないで、ホラ、言うやろドッペルゲンガーで。

つまりアレや、どう見たかて怪奇現象や！ あり得へん。

工藤はアホやから、どんだけ似てるかわわれても自分じゃ判らへんねんな。あー、まだ衝撃が抜けへんで？ どないなっとなねん。

っちゅーワケで、オレはナニワの高校生探偵、服部平次や！

作者の……朧月のアホがな、どうしても後書きに何も書かへんのは読んでくれとる皆に失礼やて、

リクエストされてもおらへんのに、こない奇妙なトークコーナー設けてしもたんや。

オレの関西弁書くんも、実は相当四苦八苦しとるらしいんや。もう、こら関西弁やのーて「服部平次」の口調やて自分に言い聞かせて書いてるっちゅー話やで。

少しでも、違和感感じさせてへんとなえけどなあ。

あ。もう、スルーで全然構へんで！ どーせロクなもんにはならんやろーしな。

せやけどな、この黒羽っちゅー兄ちゃん、けつたいな奴やで？ 挙動不審っちゅーか……まるで、ホラ、アレや！ 追い詰められとる犯人みたいやんけ。

工藤が何や見覚えあるーみたいな事言うてたし、事件がらみやない

かて思っんやけどな。

けど、あの工藤にそっくりな顔や。絶対キザな奴やて踏んでたんやけど……その点普通やなあ。

やっぱり、キング・オブ・キザオは工藤しかおらへんか？

せや！ キザ言^ゆつたらもう一人居ったで！ キッドや。あのふざけたコソ泥や！

キ：「お呼びですか？ 服部探偵？」

「キッド！ ここで会ったが千年目や！ あの博物館の借り返したるで！！」

キ：「威勢だけは認めてやってもいいけど、生憎構っているだけの時間がないんでね」

「何やお！？ オレの事舐めとつたらアカンで！ 今この場で

捕まえて身ぐるみ剥いだるわ！」

キ：「それには、答えるわけにはいかねーな。今は大事な用足し中でね」

何が用足し中や！ どうせロクな用やないやろ。

例えば、この遊園地^{トロピカルランド}のアトラクションについてるオモチャの宝石狙いとか……客の指輪狙いとか、そんなケチいもんや。

折角の休日を何やと思てんねん、このアホ！

青：「あーっ！ キッド。服部君、何やってるの！ 捕まえて！！」

キ：「おや……お嬢さん。デート中にそんなおてんばは好ましくありませんよ？」

青：「違っーっ。青子は今日ただの幼馴染の快斗と……アレ、そ

う言えば快斗は？」

キ：「……………」と、と、トイレ、だと思えますが？ お嬢さん」
青：「えっ？ もう、いつも肝心の時にいないんだから！」

ん？ 黒羽が居らへん？ 何でや……トイレなんて、一言断るやろ、フツ。

まさか、コイツ……！？ は、アホな。あの鈍い兄ちゃんがキッドのわけあるかい。

ハハハ、アホらし。工藤〃コナン方程式よりありえへんて。あん時も吃驚やったけどな。まさか工藤があんな小っさい、園児みたいなナリしとるやなんて。

コ：「おい、服部い。どうでもいいけど、何かオメーさつきからオレの悪口言ってるか？」

「は！？ き、気のせいや！ せやから、何も言わずにその時計しまえ？ な？」

コ：「園児だのキザ男だの、オメーの心の声が聞こえた気がすんだけどなあ？」

「く、工藤、心の声なんて証拠もあらへんやんけ。それより、ホラ……青子ちゃんが見てんで？」

コ：「平次兄ちゃん、ボクの悪口言ったら、あとでバチが当たると思うよ。ねっ、青子姉ちゃんもボクの味方してくれるでしょ？」

青：「う、うん。だからコナン君！ コイツ、キッドを捕まえるのに協力してっ（>_<）」

コ：「いーよ！ 青子姉ちゃん、一緒にキッドをメッタ刺しにしようね！（^ ^）」

青：「うん……め、メッタ刺し？（^ー^）」

工藤、チヨー待て。こないな人の多い所で、そのけったいな靴バチバチ言わせてどないする気いや……
それは、キッド狙いなんか？ それとも、足が滑った言うて最終的にはオレ狙いなんか？ ヘルプや、工藤ハーン！

キ：「……じゃあ、そろそろ私はこの辺で失礼しましょうか？」

コ：「！？」

青：「！！！」

お、キッド逃げよった。メツチャ早い逃げ足やなアイツ。最後の方、完全にポーカーフェイス崩れとったで。

当然や。今回はかりはキッドに同情すんで。

オレは麻酔銃くるた事あるだけやけど、工藤が持つとるアレは凶器や！ 絶対フェアやないて。傷害罪や！

ガキのクセに、平気で極悪非道な事しよるんや。おゝコワ！

コ：「ねえ、平次兄ちゃん、今また何か言った？（にこおゝっv）」

「は？ な、何も言うてへんて！」

コ：「なあ服部い、覚えてるよ？（ぼそつ……）」

「く、工藤！ 蘭姉ちゃんも見とるで？」

コ：「蘭姉ちゃんっ、次何に乗ろつか？」

蘭：「うーん、あつ、そう言えば新しいアトラクションが出来たって知ってる？」

コ：「うん！ あ、快斗兄ちゃんも帰って来たみたいだよ」

快：「悪い悪い、待たせたかー？」

青：「快斗？ さっきまでキッドが来てたんだよ？」

快：「へ？ こんな遊園地にキッドがか？ アホ子、そりゃオメーの間間違いだ」

青：「何よー、バ快斗！」

あー、アカン。黒羽と青子ちゃん喧嘩始めてしもたわ。それにしても……何や、色んなもん投げて……のわつ。
ぎゃーつつつ……！！

青：「あ、ゴメン服部君」

快：「悪い悪い、このアホ子のせいだけど、当たらなかったか？」

「……っ！ 危ないんじゃ、ボケ！」

飛んできたんは、清掃用のチリトリや、プラスチックやのうて、あの痛そうな。

アカン、收拾つかなくなってきたやんけ、乱闘や。オレにこれ以上どうせえ言うんじゃ。作者のアホ。

臃：「はい、どうもーっ、おバかなこのふりいとーくにお付き合
いありがとうございましたーっ！！

よくぞ……よくぞ耐えてくれた最後まで（感涙）実は、私がいつも
後書きにかかる時間が二十分以上（似てる事書いてるように見えて、
実は苦労してんだよう！）

……そして、今回かけた時間がやはり同じく二十分。トークを誰に

するか悩んだ十分と、実際書き始めてから十分。

実はこういうノリの方が、後書き普通に書くより得意だったりします！（笑）会話がとことん苦手な朧月です！

でも、結局おバカです。最後までおバカです。テヘ、ゴメンよ（ハ

ハ；）だから、後書きにクレームだけはご勘弁＞＜

と言うわけで！ まあこんな下らん時間も、もしかしたら本編の幕間にでも存在したかもしれないいなノリで考えていただけると。

アタツ……ア、ウ！？ ブギヤ！ イタタタタ！（涙）何すんのさーっ、どっかからアルミ缶&スチール缶飛んで来たよ！？ ウギヤー！？」

安心せえ、皆。作者のアホ女はもうノックアウトされてんで。

とりあえず、第二話も読んでくれてありがとあな！ またこれから、オレ達の活躍暖かい目で見守っとなってくれや〜！

次回もよろし頼んまつせ

朧：「そして私も蘇るう」

「一生寝とれ、このドアホ作者！」

（ボカッ）

3rd・おさかな逃亡記、そして導かれてゆく

「快斗お！ ちょっと、どこに行く気よ！」

「うっせー、これ嫌味でやってるだろ。海底探検おさかなコースタ
ーってなんだよ！」

必死に逃げようとする快斗の衣服を、青子はガッチリと掴み、ず
るずる引きずる。

「もー、どこが嫌いなのお魚！」

「全部、全部だよっ！ どこんなポイント言えるか！」

ぎゃーぎゃーと、何やらとてつもなく下らない話題で列を出たり
戻ったりしている二人を、コナンはじっと見つめていた。顎に手を
当て、真剣な眼差しで常に視線は快斗へ向いている。

どこかで会った事がある。街中ですれ違ったレベルではなく、話
をした事がある。彼が否定しようと、自分の記憶が薄れていようと、
それは恐らく確かな事に相違ない。

雰囲気も、声も覚えはあるのにどうしてもそれが思い出せない。
そもそも、一度会った人の事は、あまり忘れる事などなかった筈だ。
ましてや、そんなに遠い過去に出会った記憶でもない。

暫くの間、目を細め、思索にふけていたコナンの頭上から声が
降った。

「何や、さっきから何考え込んでんねん？」

見上げたコナンの瞳に、彼の怪訝な表情が映る。そして、同時に

青子と漫才喧嘩をしていた筈の快斗が、急に大人しくなり、ちらりとコナン達に視線を移した。そんな快斗を一瞥したコナンは、すぐ平次に視線を戻し、そして小声で囁いた。

「あの黒羽快斗って奴だけど……オレ、絶対どつかであつてる筈なんだ」

すると、平次には呆れ顔が浮かんだ。

「……せやからな、お前に似とるて言うてるやろ。それで錯覚してるんちゃうか？」

「いや、そんなんじゃない。最近何度が会つてる筈なんだよ。思い出せねえけど」

「それは、アレや。姉ちゃんに誤解された時やないか？ お前言うてたやんけ。街で一度すれ違たて」

「いや、そのときの事じゃなくてよ……どつかで………」

呟きながらも、黙り込んだコナンの口からは、それきり言葉は返らなかった。列が進むたび、無意識に前の人について脚を動かす。そんな感じの動きしかない彼は、明らかに全神経を自分の思考に集中させている。

平次は当然首を傾げた。数秒待つてみても返答がない事を確認すると、仕方なしにも、快斗と話し始めた。

「お前、けつたいなやつぢやな。なんでそない魚が嫌やねん？」

「だーから、理由聞かれても困るんだって。生理的に受け付けねーもんあるだろ？ それが、オレにはあの物体Xなんだよ」

「食うには平気なんか？」

「く、食う！？ やめろ、殺す気か！」

「いや、そんなワケやあらへんけど、そないに嫌なおさかなコース

ター、次オレらの番やで？」

「へ？ ……はあっ？」

自分達の前に並んでいたカップルの列が、ついに誘導されたのを見送りながら、白け顔で宣告した。言われて初めて最前列に居る事に気づいた快斗の顔は、ざーっと青ざめる。

「それでは、次のお客様」

声をかけられた快斗の顔が、思い切り引きつった。その隣で、満面の笑みを浮かべる青子の姿など、全く目には入っていない。進むすぐその先に見えるのは、行く手に待ち受ける水槽。

「魚^{ぎよ}わー……っつ！！」

奇声を発して逃げ出そうとした快斗の手を、青子はすかさず捕まえた。

「ダメだよ快斗、ここまで来たんだから。さ、弱点を克服するつもりで。ね？」

「あ、青子……青子ちゃん？ ちょーっと離してくれねーか？ オレ、その……トイレが漏れそうで」

「あれ。トイレ、さっき行ってきたんでしょ？」

「またもよおしたんだよ！ ……じ、じゃあなー！」

焦っている様子の顔に一行の視界が集まると同時に、いつの間にか青子の手から逃れていた快斗は、凄いスピードで外へ逃げ出していた。

「じゃあな、アホ子ー！ オメーらは楽しんで来いよ！」

「かつ、快斗〜!？」

「い、行つてしもたね……黒羽君」

「そんなに、お魚が嫌いだったんだ……」

小さくなつて、ついに後列の影に隠れた快斗に、五人だけでなく、係員や他の客も啞然とその様子を眺めていた。

数秒の間を置いて、はつとした係員に慌てて席に誘導されるまでは。

「ぶはっ、アハハハハハハ！ 傑作や、お前おもしろすぎやろ!!」

コースターから降りた出口にちよん、と居心地悪そうに座っていた快斗を見るなり、平次は耐え切れず噴出した。それが更に他の人の視線を集め、快斗は赤い顔で平次をにらみつけた。

「うつせーな、魚は見るもんでも食つもんでもねーんだよ。この世から居なくなればいいもんだ!」

「いやいや、ええキヤラしてるて思うで！ 天然でアレやられてしもたら、関西人の立場ないやんけ!」

よほど快斗の態度がドツボに入ったらしく、平次は暫く腹を抱える手を下ろせなかった。何より、この彼がそんな行動をとろうとは、全く予想がつかなかったのだ。

平次視点での印象からすると、最初、快斗は無愛想でびくついて、いる変な奴だった。しかし、話したり接する度、人懐っこく、明るい性格がよく伝わる。認め辛いことではあったものの、意外に頭も

かなりきれる事が短い時間で判った。

（まあ、その辺はアレや。工藤と同じ顔でオツムがアホやったら違和感ありまくりやしな）

失礼極まりない考えを浮かべつつも、未だ俯いて何も話そうとしないコナンを放置して、平次は快斗と言葉を交わした。

元々、コナンより碎けた性格の快斗と、少し碎けすぎている平次とでは話のスピードも乗るらしい。内容はくだらない話だが、無駄にうるさいコンビが誕生した。

「あーっ！もしかしてさ、青子ちゃんのお父さんって、捜査二課の中森警部？」

「えっ？蘭ちゃん、お父さんの事知ってるの？」

蘭は、歩きながら突然叫んだ。出会って、一時間二時間一緒に居ても気づかなかった微かな違和感がようやく確かなものになったのだ。

驚いて反応した青子を見て、やっぱりと確信した笑顔が浮かぶ。

「二、三回だけど、会った事あるんだよ。お父さんの仕事についていったときに」

「へーっ、じゃあ、蘭ちゃんのお父さんもキッドに興味あるの？」

心強いね！青子のお父さんはねえ、キッド専門なんだよ。」

毛利小五郎の名前が味方にあると認識した青子は、素直に喜びの

声をあげた。

ただ、ずっと俯いていたコナンは”キッド”の単語に反応して顔をあげ、その様子に気づいた快斗もピクリと一瞬険しい顔を浮かべた。

そんな微妙な視線に気づく事なく、青子の思考はその存在への怒りに向かっていく。

「蘭ちゃんは……キッドって好きなの？」

「え？ ん、と……判んないよ。でも、そんなに悪い人じゃないと思うけど」

「そんな事ないよー!!」

困った質問を受けて、答え辛そうに言った蘭の言葉を、青子は怒鳴るように静止した。

大声に会話に加わってなかった筈のその他四名も驚いて青子に視線を送った。

「青子は、キッドなんか許せない！ 皆好きだっけ言うけど、あんなのただの盗みを楽しんでる泥棒じゃない！ 宝石盗んだと思っただけ返して、いつもそんなのばかり。窃盗をショーか何かと勘違いしてるのー!!」

「あ、青子ちゃ……」

「青子は、キッドなんか……大っ嫌いなんだから！ 世界中のキッドファンを敵に回してもいいよ！ 泥棒だもん、犯罪者だもん！」

ふざけあって喧嘩している時の剣幕とも違う、本気で憎しみ交じりの怒鳴り口調に、快斗の顔が悲しく曇った。

「……そうだった、そのバ快斗は、いつつもキッドの味方だけだね！」

膨れた顔でそっぱを向く青子に、今回はどうにも返す言葉が見つからないらしく、快斗は小さく溜め息をついた。

「え、ええんか？ フォローせんと！」

「どうフォローしろってんだよ。オレにはこの件で、アイツに言つてやれる事なんかねーんだ」

気遣わしげに平次が快斗の耳元で囁いたが、悲しい台詞が返った。そして、同時に先程まで考え込んでいた快斗への違和感が、コナンの中で一つに繋がった。何処で会っていたのか、なんて何よりも簡単な問いだった。つい先日、自分は彼と会ったばかりだ。

そう。宿命の、ライバルとして。

3rd・おさかな逃亡記、そして導かれてゆく（後書き）

こんばんはー（ハ・ハ・ハ）今回もお読みいただきまして有難う御座います！ というわけで、第三話はお魚中心でお送りしました（笑）

今回は、改訂というよりオリジナルに付け加えたシーンが大半を占めます。平次と快斗には仲良くなってもらおう。それが、今回のお話の目的ですv

そして、それがまたラストへも生きて繋がってくるのです。（と、信じているのです）

にしても、ちゃっかり後書きつけてる私（ハ・ハ・ハ）やっぱさ、一話一話読んでくれてありがとう！の挨拶したいよ><

反応くれる方には直接ありがとうを言っても、そうじゃない方にも、伝えたいもの。ありがとうって。

というわけで、次話もまたよろしく願いいたしますv v v v

4 t h ・ 発 覚 し た 全 て

コナンの頭に浮かんだ考えは、今までを思い返す程確信されてゆく。

そもそも、キッドは何処か憎めない所もあつて、絶対に自分の手で捕まえてやると誓った相手だった。キッドになった経緯はよくは知らないが、今までの快斗を思うと、何となく憎めない理由もわかる気がする。

月明かりに蒼く照らされて、いつだって強気に微笑んでいるあの大胆不敵な怪盗が今自分の目の前に居る、という事実は、少なからずコナンの心を高揚させた。

普通の高校生で、壁を作らない奴。黒羽快斗としている今なら簡単に捕まえられる。けれど、コナンは自分の頭に浮かんだ考えを一蹴した。

「おい、服部……」

青子騒動で快斗と少し離れた平次のすそを軽く掴み、周りに聞こえない小さな声で呟いた。引つ張られるまましゃがみ込んだ平次の耳に、コナンは口を寄せた。

「最初に言うけど、変な声あげんじゃねーぞ？」

「ああ、なんや？」

最初に釘を刺した。彼が自分と同程度にボリュームを落として答えたのを確認するなり、コナンは小さな声でもわかりやすくゆっくり囁く。

「今、彼女の一言で思い出したよ、黒羽の事。あいつは……キッドだ」

キッドという単語に、意図的にアクセントを置く。それを聞いた平次の顔にも驚きの表情が浮かんた。

「……ちよ、待て。工藤……お前、何言うてんねん！」

「信じられねー気持ちも判るけど、間違いねえよ。オメーより、オレの方が何度も奴と面識があるんだ。あのコソ泥の雰囲気はよく知ってる……黒羽は、あの怪盗キッドなんだよ」

「く、工藤……」

言い切ってから、コナンの胸を辛い気持ちが襲った。悔しげに唇を噛み、俯く姿に、平次もそれが冗談の類でなく確信ある事と悟った。

辛い表情の意味が、平次には少し読み取れた。快斗がもし、怪盗キッドとするならば、青子と快斗の様子を見れば、それはまるでコナン自身と蘭によく似ている。

ずっと、大切な彼女に正体を隠し続けている自分。そして、それによって傷つく彼女を傍で見ながら、それを明かせない、何も出来ない無力な自分……

何か暫く押し黙り考え込んでいたコナンは、再び口を開いた。

「服部、それでな……確信しちゃっておかしな話かも知れねーけど、頼むから今は……彼女が側に居る今は、この事は口に出さないでくれるか？ 今だけは、そっとしておいてやりたいんだ。」

「……そないな事、お前に言われんでも分かっとなるわ」

痛いほどその気持ちが伝わるから、平次も何も聞かずに了承する。コナンはほっとした顔で微笑んだ。

勿論、二人とも絶対に破らないつもりの約束だ。

彼女にとってキッドは敵。けれど、黒羽快斗は恐らく彼女の何よりも大切な存在だ。真実を知る事があれば、間違いなく彼女は傷つく事になる。

彼女が近くにいる時は、何があっても知らないフリをしている事に決めたのだ。

そう、二人とも、全くそのつもりなどなかったというのに……。

それから、コナンからも平次からもその話題は出なかった。コナンは最初のむつり考え込んだ様子でもなく、子供の演技全開で、平次と共に皆との時間を楽しんだ。

あちこち色々なアトラクションに乗って、時に叫ぶ場面や笑う場面を過ごしながら、沢山遊んだ。

快斗と青子の二人も、まるでずっと仲がよかった友達のように自然に底に馴染んでいた。

それは、普通の高校生の友人同士の集まりのように。

「……ねえ、それにしても喉渴かない？」

その何気ない呟きが、そもそもの事の発端となる事など、誰も知った由もない。

「んー、そやね。なんか飲み物買って来よか。」

「じゃあ、一緒に行こう。快斗たちはここで待ってて。」

女三人衆は、揃ってジュースを買いに出かけた。つまりその場にはコナン、平次、快斗の三人だけ残されたのだ。

自動販売機は離れた所にあるから、彼女達が帰ってくるまで時間がかかるだろう。それは、まさしく絶好のチャンスだ。

完全に彼女達の姿が見えなくなったところで、コナンが話を切り出した。

「なあ、どうして盗みなんかやってんだ？ 怪盗キッド、さん……？」

下から声をかけられた快斗は、一瞬驚いた顔でコナンを見下ろした。そこには、幼い探偵の顔をしたコナンが居る。

すぐに、快斗はポーカークフェイスにクールな表情を浮かべ、少し低い声で応えた。

「……何の話だ？ オレは黒羽快斗だっつってんだろ？ ただの高校生。キッドとは何の関係もねーよ」

何をバカな話をとでも言いたげに、呆れた笑いと溜め息が漏れた。そんな態度に、コナンの表情は先程より幾分鋭く険しく変わる。

「隠すなよ。もう、オレ達は全部分かってんだからよ。」

「全部って、何が？」

「オメーが怪盗キッドだって事。多分……そうだな、二人目だ。父さんから聞いた事があるキッドとは少し様子が違うみてーだし、ど

ういう経緯で後を継いだかは知らねーけどな」

「せや。オレも、このボウズから聞いて色々考えたんやけど、アンタとキッドの雰囲気、重なる所がめっちゃあるみたいや」

平次もコナンに同意し、頷いた。すると快斗は目を細めた。

「……オメーら、勝手な事言ってくれるけど、何か証拠はあんのか？」

「別に……けど、こっちはもうお前の名前も、学校も知ってた。調べればすぐにわかる事だろ。彼女が離れるまで待っててやったんだから、白状しろよ」

同級生の無駄に気取った名探偵とは、また全く違う強引で強気な追い詰め方だ。有無を言わせないその慧眼に捉えられたら、幾ら言い訳しても無駄。

科学にも何にも頼らず、真っ向から確信した事実を突きつけたコナンに、隠し通すのはもう不可能と観念した。一つ、ため息をついた快斗の顔に、キッド特有の不敵な笑みが浮かぶ。

「やっぱり、気付いてたんだな。さっき青子が言った言葉の反応見ればオレも薄々気づかれたと思ってたけどな」

名探偵には叶わないね、とキッドらしい口調で言った快斗を、コナンも平次もぽかんと見つめた。

「……白状させるつもりではあったけど、やけにあっさり認めたじゃねえか」

「今ここで言い逃れたとしても、名探偵の確信は変わらねえんだろ？ オレはマジシャンだ。トリックのタネを見破られておいて、無様に証拠とかにすがり付くのはモラルに反するんでね」

「中々潔いじゃねーか」

「ああ、それに例え分かった所で、今ここで捕まえるつもりはねえんだろ？ オレを捕まえるなら、怪盗キッドとしてのオレを推理で追い詰めてって、そういう奴だろ……お前らは」

そう話す快斗の顔には、絶対の自信があつた。彼はコナンや平次をそういう意味で信じて認めている。

「……確かにな。今“黒羽快斗”を捕まえたとしても、嬉しくもなんともねえよ。お前を捕まえるのは、お前のトリックを推理で破った時だつて決めてんだ。それに、彼女を悲しませなくなつたんだよ。オレもお前と似たような身分だからな。」

隠し続けるその辛さ。涙を流すたび、訴えて来る度胸に痛みが響く。それは、恐らくコナンが考える、快斗との唯一で絶対の共通点なのだから。

二人の探偵と、一人の怪盗はその場で暫く対峙した。コナンも平次も、目の前で不敵な笑みを浮かべる彼の変化に驚いていた。

それは、高校生黒羽快斗ではない。外見だけ高校生だが、確かにそれは盗みとマジックの天才、怪盗キッドなのだ。

「あっ！」

蘭や和葉と自販機に向かっていた青子は、突然声を上げた。

「何や？」

「どうしたの？ 青子ちゃん」

尋ねると、彼女は少し慌てた様子で、二人に言う。

「実はホラ、快斗の携帯、間違つて持つてきちゃった」

そう言つて、彼女はバックからその携帯電話を取り出した。もつてくれと言われて預かったものをついそのままにしまつていたのだ。

その小窓を見て、青子は困つた顔を浮かべた。

「蘭ちゃんも和葉ちゃんも、ごめんね、先に行つてくれる？ 何か四回も着信入つてるみたいだし、急ぎの用事だとまずいから、ちよつと快斗に渡してくるよ」

「あ、じゃあ私達も一緒に行くよ」

「そうや。三人で行こ」

顔の前で手を合わせ、必死に謝る様子に、蘭と和葉は目を合わせ、頷きあつた。しかし、青子は自分のドジに付き合わせる事が申し訳なかったのだ。笑つて首を振る。

「大丈夫。すぐ追いつくから。二人は先に行つてて」

青子は明るくそう伝えると、駆け足で元居たそこに戻つていった。何も知らずに、その携帯を渡すだけのために。

「あ、居た居た……」

視線の先に快斗の姿を発見した彼女は、何も考えずに近づいた。

そこで、彼らがしている会話など、全く予想が出来る筈などなかったのだ。

4th・発覚した全て（後書き）

どうも、こんばんは（^ - ^*）

今回もまたお読みいただけて幸せですv v

コナンの気持ち、快斗の気持ち、しっかり伝わったのであればよいのですが……><

次回、最終話……になるか、それともまた違うものになるかどうかは、私が加筆エピソードを加えるかどうかによります。

来週、まだ時間ありますね^^土曜日最終回と日曜日最終回、どちら希望ですか？

というわけで、最後までお楽しみいただければ幸せですv

それでは、今回もまた有難う御座いました！

5th・全てを知った先にあるもの。

「……だろ？」

突然耳に届いた会話の、あまりに慣れない雰囲気、青子は立ち止まった。そっと木陰から覗き見ると、何やら深刻な話をしているのが判る。

三人とも、驚く程の変貌ぶりだった。大人っぽく、クールで強気な視線を快斗に向けるコナン。そして、平次もまた同じく快斗と向き合う表情は真剣そのものだ。いや、一番驚いたのは、快斗の雰囲気だ。いつもとは全く違う顔でそこに立っている。

「か、いと？」

自分にすら上手く聞こえないほど小さな声を出して、気づかれないうちにそっと歩み寄った。その緊迫した雰囲気は、何処か声も掛け辛い。

「そつだよ、オレが……怪盗キッドだよ」

突然はつきりと耳を通った声に、青子は呆然とした。確かにソレは快斗の声で、快斗の口が動くのも見ていた。けれど、信じたくはない。

もしも……それが自分の聞き間違いであればどんなにいいかと願った彼女だが、やはりそんな類のものではないと確信してしまう。そしてそれが、冗談でなく真面目な会話だということも。

「快斗が……キツ、ド？」

今この世界に存在する何を信じれば妥当か、彼女には判らなかった。考える力が皆無になった彼女の白い頭は、ただその場で立ち尽くすしかない。

「きゃっ！」

タイミングよく鳴り響いた携帯電話の着信音に驚いて上がった青子の叫びが、三人を同時に振り向かせた。弾みで青子の手から滑り落ちた電話から、そのメロディーだけが空しく鳴り響く。

「青子……聞いてたのか？」

呆然と呟くしかない快斗以外の二人も、目の前の光景が信じられずにいた。数秒だけ、青子は唇をかみ締め無言で俯いた。ただ、尚も鳴る携帯電話を指差して、たった一言呟く。

「……………携帯、とれば？ 早く」

俯いている為、男達に彼女の表情を読み取る術はない。

ただ、快斗は一人でぐるぐる考えていた。全てを聞いていたのか、泣いているんじゃないか、そんな思考で頭をパンクさせそうになりながら、快斗は、落ちている携帯をそっと手に取った。

「もしもし？ あ、ジイちゃんか……………ああ、……………分かった……………じゃあ、な」

快斗は電話を切ると、緊張した面持ちで青子に向き合った。恐る恐る、未だに俯いている彼女に声をかける。

「あ、青子、どうして……ここに？」

「快斗に携帯渡そうと思ってね。戻ってからでもよかったんだけど、着信四件も入ってて、急ぎの用事だといけないな。って、思ったから……」

俯いたままぽつりぽつりと話す青子の声は、終始震えていた。張り詰めた表情の快斗に救済舟も出す手段が浮かばず、コナンも平次も、黙って心配そうに二人を見守った。

沈黙や気まずさが辺りの空気を覆い包む。

先に、重い沈黙を破ったのは、青子の絞り出したような声だった。

「そう、なの？ 快斗が、キッドなの………？」

顔を上げた青子の瞳に、涙が薄っすら滲んでいた。問い詰めるように瞬きも忘れた彼女から、彼自身も目を離せない。

どうしようもない問題だ。告白したのは自分。どう誤魔化せと言うのだろう。

「う、ごめんな、青子。……今まで、ずっと隠して騙して、本当に……」

いつもの自分のような、上手い言葉が紡げない。快斗は、青子が無言でただじっと自分を見つめれば見つめるほど、言葉を失った。

いつか打ち明けるつもりだった。もしも全てが終わったら、自分の口から何もかもを。許してもらえなくても、ただひたすら謝罪して。

彼女の苦しい顔は、自分がついた嘘の大きさだ。それが判るからこそ、快斗自身「ごめん」なんて言葉で済まされない事と理解して

いた。けれど、コレがこの時浮かんだ精一杯の言葉で、それしか思いつけなかった自分が快斗は憎くて仕方がなく感じていた。

どんな仕打ちも受け止める義務がある。大好きな彼女がそれで少しでも心が晴れるなら、罵られても、思い切り叩かれても、たとえ嫌われて一生絶交されたとしても。

様々な最悪の事態への覚悟は彼の中で固まっていたから、青子が次に口にした言葉は、とても驚くものだった。

「違うよ……」

「へ？」

「違うでしょ？ 青子に謝るのは絶対違うと思う。本当に悪いと思ってるなら、お父さんに謝って。青子は何も事情知らないけど、ワケがあるからしてたんだよね？ お父さんに、それ全部話して……ちゃんと自首して」

内容自体は厳しいけれど、口調は子供を諭すような、柔らかで優しさの籠る物だ。そして、それはとても真つ当な言葉だった。

青子は目に浮かべていた涙を拭い、まっすぐに快斗を見つめて切なく微笑んだ。

「もしもね、それで快斗と少し離れ離れになっただとしても。青子はいつでも快斗の事待ってられるんだよ。蘭ちゃんに聞いた話の、工藤君の事みたいだね」

その言葉と彼女の雰囲気から感じるのは、愛情と強い意志。全く予想外だった彼女の態度に、快斗はただ目を丸くするしかない。

「この話したら、オメーもつと驚いて……泣かせると思ってたんだぜ？　なのに……」

青子の顔には、柔らかな微笑が浮かぶ。

「快斗は、泣いて責めて欲しいとか思ってた？　……そりゃ、シヨツクだよ。青子はキッドを追ってる刑事の娘だし、知るなら快斗から直接言っただけ良かったから。でも……でもね、本当は知ってたんだ。信じてたけど、薄々だけど、何度もそうじゃないかって思った」

「……オメー」

「だって、ちっちゃい頃からずっと一緒に居るんだよ？　快斗の事なんて、判っちゃうんだから」

一瞬、表情を曇らせた青子の顔に、再び緩やかな表情を見せた。

「青子はね、快斗が盗みを楽しんでるとは思わないよ。だから、本当は心に隠した深い事情があるの。きつと、こんな事やりたくないって思ってる……そうだよな？　快斗」

風になびいた髪を、彼女はそつとおさえた。悲しくても、それを受け入れる強さ。

快斗は、驚きながらもただじつと、ポーカーフェイスを崩す事なく彼女と見詰め合った。

青子の姿と蘭が重なって、コナンにも切ない苦笑が浮かぶ。

「……青子……」

ふつと抱きしめたい欲求にかられながらも、快斗はぐつと堪え、出した手を再び下ろす。

「だって……だってね、青子は“快斗”を苦しめている“キッド”の事は本当に大っ嫌いだけど、でもどうしたって……“快斗”の事は大好きだから！」

それが告白になっていている事に気づいていないのは、青子のみ。純粹な意味での大好きな筈が、快斗の頬を染め言葉を奪うには充分だった。

「オレも、青子の事は一応……す、す、すすすす……」
「何よー？」

見守るコナンも平次も、何やら先程とは違う方向にいきつつある話の行く末に、ドキドキ鼓動が早くなるのを感じていた。

「けっ、んな事言えるかよ」
「はあっ？ 何それっっ」

不満げな反応を返した青子に、今度は真剣な顔を作った。

「……でもな、オメーの言葉は出来るだけ叶えてやりてーって思うんだよ。それは本当だけだよ。でも悪いけどまだキッドを辞めるわけにはいかねーんだ」

「どういう事？」

「オレは、まだキッドになった目的を果たせてねーんだ。親父を殺した奴等の野望を潰すまでは……辞めるワケにはいかねーんだよ。ああ、青子がおじさんに言うなら話は別だけどな」

切なく笑う快斗の顔を、青子は驚きを隠せず見つめた。そして、思いも寄らぬ事件の存在を聞いた探偵二人も、勿論真剣な鋭い顔つきに変化した。

青子には、全く予想も出来なかった事実だ。

「……じ、じゃあ、快斗のお父さんって……」

「ああ。親父は、殺されたんだよ……事故を、装ってな。オレは最初、親父を殺した奴等突き止めるためにキッドになったけど、あいつ等の狙いがパンドラ一つー石だって判ったから、それを見つけてぶっ壊してやろうと思ってんだ。奴等の野望を砕いてやるのが今のキッドの存在理由だよ。だから全てを終わらせるまでは、オレは自分からキッドを辞めるわけにはいかねーんだよ」

「……そいつ等の見当はついとるんか？」

今まで黙っていた平次は、ついに口を挟む。殺人事件、しかも何やら長いこと解決していない事件という。聞き流す事など出来ない話題だ。

「それは、まだよく分からねえよ。けど一度だけ、オレを親父と勘違いして命を狙ってきやがった。分かるのは、奴等が組織ぐるみで行動していると言う事くらいだな」

「……組織だと!？」

組織という単語について言葉を荒げたコナンを、青子はぎょっと見下ろした。眉間に皺を寄せ、険しい顔で快斗の返事を待つコナンのその過剰反応には、言った快斗も驚いている。

「あ、ああ。確かだぜ。奴等はオレを集団で狙ってきて、言ったんだよ。『我々』だの『あの方』だのって。随分デカイ組織な印象受けたけどな」

「そ、そいつ等っ、黒い服着てなかったか!？」

話し終わる前から、間髪いれずに食いついてくる様子に動揺しな

がらも、彼はその時を思い浮かべた。
頭に浮かんだ、あの彼らの衣装は……。

「い、いや……？ 黒くはなかった、と思うけど………？」

圧倒されながら答えたしどろもどろした口調であったが、快斗は確かにその記憶を確信していた。父親を殺した奴等を、忘れる筈がないのだ。

快斗の様子を暫く見つめたコナンだが、少し落胆した雰囲気を見せる。

「奴等とは、違う、のか………？」

呟くコナンに寄せる視線は、様々なもの。

三人の中で、唯一その事情を全て知っているのは平次のみだ。快斗は不思議な顔でコナンを眺め、青子に至っては、何がどうなっているのか全く理解できていない。そもそも、青子はコナンの正体を知らないのだから、まあ当然の反応だ。

「お待たせー！ 買って来たよ。あ、アレ、青子ちゃん………？」
「どないしたん？ すぐに追いつくって言うてたのに」

微妙な空気から生まれた静寂を打ち破る明るい二人の声に、四人は振り向いた。

その場に居る青子を不思議そうに見つめる二人の視線で、青子は

ようやく”すぐ追いつく”とした約束を思い出す。

「ご、ごめんね！　ちよつと色々あつて。蘭ちゃんも和葉ちゃんも、二人で大変だったでしょ」

慌てて、二人が両手に抱えた六人分のジュースの三分の一を受け取り、謝った。

青子の頭は未だ混乱していた。しかし、とりあえずの即興笑顔を浮かべる。

謝られた二人には別に怒っている様子はなく、また彼女達もジュースを渡しながら青子に言った。

「気にしないで。私達も青子ちゃん来ないみたいだからって帰ってきちゃったんだし」

「そや。別に何とも思つてへんから安心しい。それより、ジュースが生ぬるくなる前に飲んでしまおう？　平次のはコレやな？」

「そうそう！　えーっと、コレがコナン君ね」

六人は一斉にプルタブに手をかけた。

乾いていた喉をちょうどよく潤すジュースは、殆ど一気飲み。空き缶はほんの十数秒のうち空になった。

一息ついたら微妙な気まずさと緊張があつた四人の間の雰囲気もいつの間に消え、また再びパンフレットを覗き込む。

「じゃあ快斗！　もいつかい、おさかなコースター行こうよ」

「ちよつと待て、冗談じゃねーよ！」

「面白かつたんだから」。じゃあ、多数決ね！　おさかなコースターにもう一回乗りたい人ー！」

快斗への嫌味が大方の理由だろう。すぐに青子に賛同したコナンを見て、平次もまたそれに乗った。

「おい、コラ！ おめーら！！」

顔を引きつらせながら怒鳴った快斗に少し遠慮しつつ、蘭と和葉も青子側に一票入れる。

「ご、ごめんね黒羽君……結構楽しかったの」

「せや！ 黒羽君も今度は一緒に乗ってみたらええんちゃう？ 魚嫌い克服できるかも知れへんやん」

「ね？ ほーら快斗。多数決で決定！」

悪戯っぽく微笑む青子に、ただただ顔を引きつらせる快斗。けれども、そんな時間すらも快斗にはありがたかった。正体を知られた先には、もっと気まずさ漂う雰囲気が待っていると、ずっと思っていたのだ。

嫌そうに抵抗して引きずられながらも、心のどこかで幸せを感じる自分が居る事に、快斗自身も気づいていた。

そう、一時休戦。先程の話題には、四人誰も触れる事なく楽しい時間だけが過ぎていった。おさかなコースターでげっそりした快斗にも、その前通りのような反応が返る。

キッドに対してでなく、変わらず快斗として接する皆に、彼は柄にもなく感謝すら覚えた。

帰り道、前を歩く蘭たちの目を盗んで、青子は快斗に、そつと話

しかけた。

「あのさ。青子、あれからずーっと考えてたんだけどね、お父さんにも誰にも、やっぱり言わないから」

「へ？」

あまりに唐突な話に、一瞬快斗自身戸惑いを隠せない。彼女は真剣な表情で続けた。

「でも、条件はあるの！ これだけは約束して。絶対に、いつも生きて帰ってきてくれるって……それから、パンドラを壊したら、もうキッドは辞めるって」

「あ、青子？」

聞き返すと、苦しげに唇をかみ締めた青子は、少し視線をずらした。

「だって、青子分かるんだもん。快斗が、キッドが、どれだけ盗いさんを好きだったか……小ちゃい頃から、ずっと知ってるから！それに、どうしたって仕方ないじゃない。そんな事情だったら、簡単に自首してなんて言えないよ！」

「でも、オメー……」

「だって、キッドは快斗が盗一さんの為に見つけたたった一つの正義でしょ？ それに……それに青子、やっぱりどうしたって、快斗が居なくなるのは、悲しいから」

その言葉に至るまでの葛藤を、快斗はしっかり理解している。上目遣いに自分を見つめる青子が、どんな思いで居るのかという事も、目を閉じて、数秒だけ。青子が、言った言葉を心に反復させた。

「……絶対どこにも、居なくなんならねーよ。……約束だ」
「うん！ 約束だからね！」

快斗の答えに、青子はようやく嬉しさ一杯の笑みで頷いた。彼女の、花がぱつと咲くような可愛らしさに、つい快斗自身顔が緩む。いつからこんなに可愛くなったのか、と必死で考えながらも、快斗は優しく微笑み、出された小指に自身のそれを絡めた。

「すごく熱いね、快斗兄ちゃん達！」

「ぼ、ボウズ！？」

「コナン君！」

いつの間に足元に居たのか。冷やかしからかうように笑ったコナンに、快斗と青子の二人は一瞬で耳まで赤く変化した。

コナンは、笑顔のままぐつと快斗の服を自分の元へ引き寄せた。

「な、なんだよ？」

「いいから、快斗兄ちゃん。耳貸して！」

子供のような無邪気な笑顔と裏腹、そのすそを掴み引つ張る力はその凄。その力だけで、コナンの口元まで耳をおろされた。

コナンは、青子に聞こえないよう、手を添えて囁く。

「安心しろよ、誰にもオメーの事はばらさねーから。親父さんの殺されたって事件、オレ達も協力してやるよ……但し、オメーがただの黒羽快斗で居る時だけはな。怪盗キッドにはオレ達は容赦しねえ。次こそはぜってー捕まえてやつから、そのつもりでいろよ！」

「……………名探偵……………」

快斗がコナンの顔を覗くと、そこには凄く挑戦的で不敵な、探偵

の顔がある。

「それが、服部とオレの決めた結論だ」

それを聞いた快斗の顔にも、つられるように挑戦的な笑みを返した。

「ああ、オレも容赦してやらねーから、覚悟しろよ？ 名探偵……」

5 t h・全てを知った先にあるもの。（後書き）

こんばんは！v第5話、エピソードがなければ事実上の最終回です！
頑張って加筆エピソードができるといいな！<前どおりのしよぼさ
になりませんように！><

と言うわけで、有難う御座いました！

次話にて、また最後のご挨拶をお会いできれば幸せです！v

ED・その輝きは宝石の如く

「あーあ、またハズレか！」

そこは、美術館の屋上。白い手袋の間から輝くのは、ブルーサファアのビッグジュエル。だが、今夜もまたそこから赤い宝石は見えない。完全なハズレだ。

先日の、Moon Lightといい、本命がことごとく外れるというのはどうにも空しい。

ただ、蒼い月が照らす宝石の光は、先日同様美しい。ハズレなどという言葉一つで終わらせるのは、失礼な事かも知れない。

暫くそこで宝石の光に見惚れていたが、下の階に繋がる扉が勢いよく開いて振り向いた。

戸を開けた小さな姿が、ハアハア息切れている姿に、キッドは思わずニヤリとした。

「よお、名探偵！」

声をかけると、彼はむっとした表情を浮かべる。

「それ、いらねーんだろ？ さっさと返せ！」

「へいへい。今回もまたオレのシナリオ通りの展開だからって、んな不機嫌面すんなよ」

鼻で小さく笑って、キッドは彼の元へビッグジュエルを放り投げた。慌てて受け取ったコナンは、そのまま靴のダイヤルに手を持つ

ていく。

「うつせーな、これからが本番なんだよ。言っただろ？ キッドのお前を次こそはぜってー捕まえてやるって」

バチバチと稲妻が走るような音を上げるコナンの右足の先には、先程から置いてあった子供用のゴムボールがある。屋上は一般解放されているから、小さな子供が遊んだ時のものを放置されていたのだろう。

「望むところだぜ、オレを捕まえてみな？ 名探偵」

「ああ、ならそのリクエストに応えてやろっじゃねーか」

そう答えたキッドも、背広の中からトランプ銃を取り出し、コナンに向けた。双方が不敵な笑みをぶつけ合うその間に、冷たい風が吹く。

コナンが蹴ったゴムボールをひらりとかわしたキッドが、トランプ銃をコナンの足元めがけて二発、三発と放つ。それもまた飛ぶようにして避けながら、コナンはボール射出ベルトに手をかけた。

その瞬間、キッドの顔に深い笑みが刻まれる事に気づいたのも、束の間だ。

「Game overだ、名探偵？」

「う、わっ!？」

膨らんだボールがいつもと少し様子が違う事を考えても、既にそこに当たる寸前の足を引き下げる事など出来なかった。

シューズの力で増強されたキックによって、パン、と破裂したボールから、ピンクの煙幕が吹き出た。そして、同じく破裂と同時に

漏れた液体がもろ靴にかかり、着地と同時に足を滑らせた。

「って……くそ、オイルか！」

「ふ、傑作だぜ。煙幕ありがとうな！　では、またいずれかでお会いしましょう、名探偵」

煙幕の向こう側の煙が動く。

「くそつ、逃がさねーつつってんだろ！」

先程のゴムボールが近くに転がっている事を知っていたから、手探りでそれを見つけ出し、強引に蹴り飛ばした。

「ぎゃッ！」

その叫びに、手応えを感じたコナンは勝利を感じて笑った。しかし、煙幕が晴れた先には、既にキッドは居なかった。

代わりに、何か白いものが飛んでいる空から、ひらひらと紙が舞い降りる。

『ベルトのメンテナンス、使い心地はいかがじゃったかな、新一君？　ある時は気さくな隣人博士の怪盗キッドより』

コナンは、悔しさを感じながらむつつり頬を膨らませた。

「最低だ、バーローツ！！」

それと、同時刻。

「……いつてえー！　くそ、最後まで油断ならねー奴だな」

ハンググライダーを広げ、飛び立とうと屋上の端に立った直後だった。コナンのサッカーボールが直撃して、ハンググライダーを壊した上、キッドはそこから突き飛ばされた。

「あんなトコから落ちたって、そりゃ大した怪我はしねーだろうけど、危ねー奴だな！」

そう。その美術館は、建物自体あまり高くはない。しかも下は芝生だ、が。怪我位はさせられる事間違いないその状況に、キッドは顔を顰めた。

「しかし、咄嗟にスチロールの人形つけた鳩飛ばしたのはいいけど、暗い中で誤魔化されてくれてよかったぜ」

木の枝に引っかかり、ぶらーんぶらーん、と左右に揺れながらキッドは一つ溜め息をついた。

数日後、江古田高校。

前日は中森警部が指揮する警察官達との宝石強奪合戦を繰り広げた。やはり、警部相手だとコナンが絡むよりもずっと仕事がやりや

すい。余裕の勝利を挙げた快斗は、早めに登校するなり机につつ伏し、気持ちよく目を閉じた。

深夜遅く仕事をしたため、殆ど寝てない睡眠不足を学校で解消しようという魂胆だ。

「ちよつと、快斗？」

「ん？ 何だよ。青子か。ふあああ……」

眠りにつきかけた所を起こされて、頭をかきながら欠伸を零す。顔を上げた先の青子は、朝から不機嫌モードまっしぐらだった。

登校するなり、席に座っていた快斗に声をかけ、ジト目で睨む。

当然、快斗は怪訝に感じて首を傾げた。青子の目が据わる。

「今日の、新聞、見た？」

一語一語区切って言う様子はやはり、怒り……というかむしろ殺気に近いものが籠る。

「いや、ただだけど？ ……お前何怒ってんだよ？」

ついこの間、あれだけ理解したといった彼女と、前日の夕方も楽しく学校帰りの道で別れた。その翌日がこれ程機嫌が悪くなるというのはどういう事か。

悩む快斗に、彼女は今朝の新聞を突き出した。眠さが先に立って、買うのを忘れた朝刊だ。

「えーつと……？」

”怪盗キッド、またまた登場！！ 無能な警察官達を翻弄し、華麗

に夜空を飛び回る。いつぞやのキッドキラの少年が出て来ない限り、彼の向かう所、敵なし!?”

でかでかとそう書かれた下には、華麗に空を舞うキッドと、悔しそうに地団駄を踏む中森警部（青子の父）がいる。

その、あまりの間抜けさ加減に、快斗は思わず吹きだした。

「ぶつ、……いいじゃねえか、キッドのおかげで皆さん有名になったんだし?」

語尾を明るく高い声で言った快斗の、ふざけた言葉に、青子はついにぶち切れる。

手にしていた新聞紙をぐしゃ、と丸め、快斗の顔面にぶち当てた。

「よくないわよーっ！ このバ快斗ー!!」

「何だよ、アホ子!」

快斗もぶつけられて赤くなった額をさすり、ムキになって声をあげる。が、しかし。

「……お父さんに、全部言いつけてやるんだから……!!」

青子が次に口にした叫びに、快斗は固まった。

こんな時までそれを持ち出す青子はずるいと思う。が、それすらも青子の気持ち次第だと、顔を引きつらせながら頭を下げた。

「……………ごっ、ごめんなさいでした、アホ子……いや、青子様」

その態度を見た青子は、一瞬きよとした顔を浮かべた後、悪戯っぽくニヤリと笑う。

「ふーん？ 分かればよろしい！ …… 今度から、青子の言う事何でも聞くのよ？」

勝ち誇った顔でそう告げた青子に、頭を下げたままの快斗も何か言い返したい気分で一杯だった。しかし、刃向かうわけにはいかず、苦虫を噛み潰したように小さく「はい」と答えた。

「で、できる限り聞けるように、努力します……青子様」
アホコさま

「今、青子の事変な呼び方しなかった？」

ギロツと睨む彼女に、すかさず笑顔で首を振る快斗。そんな二人の姿に、教室内ではまた様々な言葉が憶測として飛び交った。

本当の事を打ち明ける事で、前よりも心が楽になった。だが、同時に青子に握られた弱みは、恐らく一生効き続ける事になる。

そして、前よりも一層激しさを増した某探偵の相手もまた気が抜けない。

これからの受難な毎日を浮かべると、快斗は天を仰ぎ、大息をついた。

けれど、そんな波乱だらけの毎日は、あの蒼い月に照らされた宝石の如くキラキラと美しく輝いていて、笑顔耐えずにふざけあうそんな時間は、何よりも大きな宝物だ。

これからまた、蒼い月光の下で華麗に舞う白き姿は、月明かり
というスポットを浴びて人々の心を輝かせてゆく事だろう。

ED・その輝きは宝石の如く（後書き）

こんばんはー 朧月です

というわけで、最後までお読みいただきまして有難う御座います！！
エピソードをお送りいたしました。

ああ、後書き打ちながら、右手の骨が痛い><なぜ？

というわけで、今回何とか、加筆して出すことが出来ましたv
なんかね、うん。短編時代の終わり方じゃちよつとあつけなさ過ぎ
だろうって気持ちだが、元の話を作った当初からずーつとあつたんで
す。

なので、入れるとしたら、ラストにコナンとキッドとの対決をブラ
スしたい！という気持ちが何とか叶った瞬間といえますか><

本人、何とかまともな対決がさせられたと思っっているのですが、あ
んまり頭使うの苦手なので、それが逆に違和感が生まれたらやだな
あ（^ー^；

蒼い月の光というタイトルに見合った終わり方に、今度こそはして
やるぞ！と思っておりましたが、いかがでしたでしょうか（^^）
もしも、楽しいと思ってくださった方が居るのだとしたら、凄く幸
せですv

扱いがあまり得意でないキッド様ではありますが、何とか頑張らせ
ていただきましたv

そして、頂いたお言葉にもまた改めて嬉しくレスをつけさせていた
だきますねv私としては、いつでも大歓迎ですv

短編とはまた違った雰囲気のお話として、その頃より新鮮な思いで
見ていただけたとしたら、私はとても幸せです！！

本当にラストまで、有難う御座いましたーっ！
また、次回作や他の作品などでも、是非お会いしましょうっv

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7633c/>

蒼い月の光 ~ Blue Moon Night ~

2010年10月8日21時39分発行